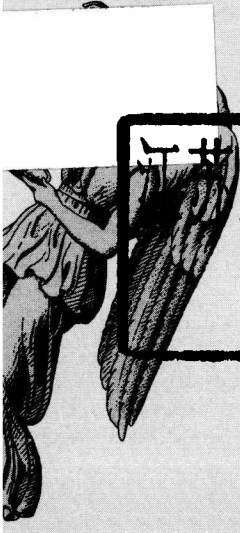
女が自分を生きるということ

三枝和子
Kazuko Saegusa

海竜社

女が自分を生きるということ

三枝和子
Kazuko Saegusa



江苏工业学院图书馆
藏书章

海竜社

［著者紹介］

三枝和子（さえぐさ　かずこ）

1929年、兵庫県生まれ。関西学院大学哲学科卒。教員生活ののち、執筆活動に入る。

『処刑が行なわれている』で田村俊子賞を、『鬼どもの夜は深い』で泉鏡花賞を受賞。著書多数。

近著には『伝説は鎖に繋がれ』『女の哲学ことはじめ』（以上、青土社）、『うそりやま考』（新潮社）等がある。

女が自分を生きるということ

一九九七年二月二十四日　第一刷発行

著　者＝三枝和子

発行者＝下村のぶ子

発行所＝株式会社　海竜社

東京都中央区築地二の十四の一　〒一〇四

電話＝東京一〇三（三五四二）九六七一（代表）

振替＝〇〇一一〇―九―四四八八六

印刷所＝新協印刷株式会社

製本所＝大口製本印刷株式会社

乱丁本・落丁本はお取り替えいたします

©1997, Kazuko Saegusa, Printed in Japan

ISBN4-7593-0495-9

女が自分を生きるということ

＊目次

女であるということ［女の思考方法と男の思考方法］

五十代で手に入れた人生の拡がり——6
「人間として」でも「女として」でもなく、「生きものとして」——10
女の思考方法と男の思考方法——22
えたいの知れない力に押されて——31
たくましい平安の女性たち——43
何故、ボーヴォワールか——58

女が自分を生きるということ［母系家族か父系家族か］

女が結婚するということ——64
母系家族から父系家族への変容を追う——72
男が父系社会をつくったのは何故？——80
何故、妻問（つまど）い婚は嫁入りに移行したか——88
妻の親の家で暮すこと——94
すべての発端はヒトのメスの優しさにある——100
男性原理による自己確立は家庭を崩壊に導く——105

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

女にとっての愛のかたち［女の性と男の性］
女には「恋愛」ができない？——112
男には分らない女の「性」——120
男と女が対等の関係の愛は幻想か——131
「恋愛」は男の願望の産物——140
「恋愛」は本能からかぎりなく遠いところにいる——144
女が女を見つめ直すとき［母性文化の源流を究める］
こうしてギリシア神話の女神たちは生まれた——160
神々が語る母権社会から男性優位社会への移行——170
女性文化が生んだ柔らかさと優しさの時代——178
女の目から見直す非婚主義——190
かつて女性の地位の高かった国は……——197
戦争はヒトのオスの宿命なのか——201
あとがき——206

装丁……勝井三雄

［女の思考方法と男の思考方法］

女であるということ

五十代で手に入れた人生の拡がり

初めての外国旅行がもたらしたギリシアへの目覚め

私は五十四歳のとき、初めて外国旅行というものを経験した。長期にわたって家を離れる自由を獲得したからである。私の場合、夫の両親の面倒を見なくてもよくなったのである。

人それぞれ、特に既婚の女性はその立場上、自分の自由意志で行動できる可能性がきわめて少ない。しかし、それも年齢が解決してくれるときが来る。それが五十代である。たいていの人は子供からの自由だろう。これも大事だ。

さて私は、それこそ身体に羽が生えた気分で日本を飛び立った。行き先はギリシアだった。当時の自分を振り返ると、行き先はギリシアでなくとも、ヨーロッパであれば、どこでもよかったかもしれない。しかしそれがギリシアだったことに、廻り道をせずヨーロッ

パ文化の本質に迫ることのできた幸運をいまは感謝している。遅い出発に神が手を差しのべてくれたような気さえする。

旅立ちは、本当に偶然に、詩人の多田智満子さんが主宰するギリシア神話研究会のメンバーからの誘いだった。何よりも横文字に弱い昭和ヒトケタ生まれにとって、最初からヨーロッパ一人旅など、恐ろしくてできるはずはない。ツアーは全く有難かった。

加えて、メンバーの一人に古代遺跡を歩き廻っている女医さんがいて、彼女と友達になれた幸運がある。女医さんはギリシア語がベラベラで、一人でギリシア各地をうろついている。ツアーに入ったのは交通費とホテル代を安くあげるためで、たいてい別行動をとっていた。この女医さんのおかげで、西洋古代史の三浦一郎先生に知遇を得て、いよいよ私のギリシア通いが始まった。

目的は、はっきりしていた。その頃、ウーマンリブの運動は下火になり、フェミニズムの論議が私よりも一廻りも二廻りも下の女性たちのあいだでようやくさかんになって来ていたが、私はフェミニズムは哲学を打ち出さなければならないと思っていた。そのためには男性の哲学発祥の地であるギリシアを訪れなければならない、と。

本による勉強は、大学の専攻が哲学なので、幾らか過去の蓄積があった。しかし遺跡をめぐりギリシアの古代社会の構造に直に触れると考えが変って来た。私は、これまで男性

の視点からだけ捉えられて来た古代ギリシアの社会や思想に、女性の視点からの見直しを試みる必要を感じたのである。そのことが直ちに、現代日本の女性問題に根本のところで関わって来るにちがいない、と考えた。

ケンキョ（？）な開き直りでヘソクリみたいに単語を貯めて行った

そこで私は、突然、ギリシア語を勉強しよう、と思い立ったのである。お笑い下さるな、五十七歳のときである。古代ギリシア語、などという恐れ多いものではない。ギリシア哲学、ギリシア悲劇、ギリシア喜劇、いずれも碩学（せきがく）の先生がたの翻訳がある。有難くそれを利用させていただくにやぶさかでない。問題は会話である。

ギリシア各地を廻るあいだ、特に遺跡めぐりなどでは英語が通じないことが分った。女医さんの後ろにくっついて行けばいいのだが、お互い、別々の仕事を持っているので、うまく予定の合うことの方が少ない。

奮起一番するしかないのである。しかしまあ、初老の頭の何と固いことよ。ザルで水をすくいあげるように、片端から滑り落ちて行く単語をかき集め、かき集め、私はボチボチ歩き出した。

ギリシア語はとっかかりが大変である。三島由紀夫が三十幾つかのとき、ギリシア語を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

勉強しようと思い立って、東大の教室に通ったが「あんな厄介なもの、やってられるか」と投げ出した、と友人の村松剛(たけし)が回想録で書いていたのを読んだことがある。そうかもしれない。三島由紀夫は頭がいいから少し〝ザル水〟になっただけで、かっと来たにちがいない。それに東大みたいなところで若い人に混じって、というのは一番いけない。

私は女医さんに一週間に一度手ほどきしてもらい、月に一度、三、四人でギリシア人の先生に習う会に出た。この三、四人は私より上級の人たちばかりなので、ついて行くのが大変だがみんな親切である。

私は、自分の頭はそんなによくないし、おまけに五十代後半のオバタリアンである、という自覚を強く持つことにした。忘れてもともと、一つでも引っかかれば御の字と、ケンキョ（？）な開き直りで少しずつヘソクリみたいに単語を貯めて行った。時には何処へ置いたか忘れてしまうこともあるが、それでもいまでは一応一人旅もできるし、友達を何人か連れて行って責任者として向うの人と交渉することもできる。

五十代にして手に入れた、意外な人生の拡がりであった。自分の仕事にも三十代四十代の頃には考えられなかった厚みも加わったし、生涯にわたる研究やテーマも見えて来た。これからはその完成を目指して進むのみ、ということになろうか。五十代の自由が与えてくれた財産である。

「人間として」でも「女として」でもなく、「生きものとして」

やっぱり男のひとの視点なんだなあ

一年間だけという約束で、共同通信社で文芸時評をやったことがあった。女性の批評の必要性、つまり女の読みかたを発表する必要性、を痛感しているから、少し無理をして頑張ったのである。そして、なかなかに面白い発見をした。以前は漠然と読んでいた各紙・誌の文芸時評が、へえ、やっぱり男のひとの視点なんだなあ、という形で見えて来ることが、しばしばあったのである。

たとえば大庭(おおば)みな子さんの『啼く鳥の』が完結したとき、各紙ともに評判がいいのだが、先行作品の『霧の旅』と比較して『霧の旅』は失敗作だったが『啼く鳥の』の方はうまく行っている、という形で摑(つか)まえている批評に出くわしたときなどがそうであった。同じだのになあ、と私などは思ってしまう。文章だって、構成だって、一続きに書かれたもので

ある。

違う点と言えば、『霧の旅』は百合枝という主人公の女性の物心つき始めてからの成長のプロセスに一族の人たちが関わって来る、という構造をとっているのに対して、『啼く鳥の』の方は現在、五十歳を超えた百合枝夫婦を中心に、一族の何組ものカップルが、一族の一人の死へ向けて同時に関わって来る、という構造をとっていることだけである。前者が時間の流れでもって展開された作品であるのなら、後者は空間の拡がりでもって展開された作品である。

ひょっとしたら、とそこで私は考えたのである。男のひとは、夫婦、ないしは男と女の関係においての女性を摑まえることはできても、それ以外の女性の姿、たとえば女の成長のプロセスなどといったものに対する目が開かれていないのではないか、そのことが『霧の旅』という作品をつまらなく感じる読みかたの底にあるのではないか、と。

もちろん、こんなふうに言うのには理由がある。『霧の旅』の書評を頼まれたとき、私は、女性にとってビルドゥングスロマンは可能なのか、また必要なのかという問いを突きつけられた気がして、そのことを疑問形のまま提示した。疑問を出したけれども、大庭さんの作品から、私はすでに答を与えられていた。女性にとってビルドゥングスロマンは不可能だし、また必要でもない、という見通しである。

ビルドゥングスロマン――このドイツ文学から輸入された小説の形態を、どのように訳してもよいのだけれど、一応、自己形成小説とか、教養小説とかいうふうに捉えて、一個の人間の人格形成が何によってなされるかを追究していく小説と規定した場合、一個の人間とは、いったい何か、という問題も含めて、女性にとって大変興味のある領域となるのである。

これはまた、男のひとたちのよく試みるアイデンティティ小説、自己確認小説とも深い関わりを持つ考えかたである。アイデンティティ小説というのは女にとって可能だろうか、また必要だろうか、という問いも、自己とはいったい何かという問題をも含めて、これまた女性にとって大変興味ある領域となるのである。

こうした観点から大庭さんの『霧の旅』を読んで行くと、男のひとにとって、それは何とも摑み難い、ふわふわした、まとまりのない作品だったにちがいないということが見えて来る。男のひとが書けば、必然的にビルドゥングスロマン、ないしはアイデンティティ小説になるはずの素材、道具立てであるにもかかわらず、である。

男と女は、ともに人間である、というほどにも共通点を持っているのだろうか

たとえばビルドゥングスロマンであるならば、学校時代の友人、教師、読書などという

プロセスを通って、次第に文化に触れて人間形成をして行く姿が描かれるのだが、『霧の旅』の主人公百合枝は一族の中心的な女性ふうの生きかたに接しながら、きわめてぼんやりした形で、むしろ無意識に近い形で、何とはなしの影響を受けて育つのである。文化に触れて人間形成をする場合、その人間は何がしかの歴史を背負う、という形になるのだが、百合枝の人間形成には、そのような積み重ねや、進歩のあとはまるで見られない。人間のつくった倫理や慣習とは別の次元で、常識的に言えば気ままに生きたふうが、じわりと百合枝を支配して来るのである。

もちろん、だからと言って、百合枝が自分のルーツをふうに求めている、という形でこの小説が書かれているのではない。そうした書かれかたは、先にも述べたアイデンティティ小説の発想であるだろう。ふうと百合枝の関係は、もっと漠然としたものである。漠然としたものでありつつ、百合枝は、ふう的な生きかたをする他ないような、誰に強制されるわけでもなく、また自分から自覚的に選びとるというわけでもなく、それでしかないような形で影響されて行く。こうした発想が私には、きわめて女性的な発想、あえて言えば、女流作家の書くビルドゥングスロマンないしはアイデンティティ小説であると思うのである。

もっとも、このような発想は、もはやビルドゥングスロマンでもアイデンティティ小説

でもないのだから、あえてそう呼ばなくともよい、女性にはこうした発想の小説は不可能だ、あるいは必要ない、と言い切ってしまってもよい、という判断を、これは含んでいる。すなわち、女性にとっては一個の人間形成、あるいは自己確認、などという意識は無用だと私は思うのである。

ただ、私がこんなふうに言うと、おおかたの自覚的な女性からは大変な反撥を受ける。受けるだろうと予想する。何故なら、戦後は言うに及ばず、明治の開国以来、優れて進歩的とみなされた女子教育は、女性も一個の人格であるとか、女性も人間としての価値に目覚めなければならないとか、総じて、いわゆる近代的自我の自覚の方向への潮流のなかにあった。

現に、私自身にしてからが、ごく最近まで、そう思っていた。とにかく女は遅れているのだから、男性のレベルにまで、一個の人間として対等の資格を得るようになるまで努力しなければならないと考えていた。

しかし、果してそうだろうか。男と女は、ともに人間である、というほどにも共通点を持っているのだろうか。もしも、この地球上に生きている生きものを二大別するならば、人間とそれ以外の生きもの、というカテゴリーで分別するのと、オスとメス、というカテゴリーで分別するのと、どちらが私たち女性にとって納得の行くものだろうか、という問

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c